

武蔵野日曜聖書講筵

力ある愛

――詩篇第86篇――

1959年8月23日

小池辰雄

幼児の心の叫び「主よ!」と全的に投じて祈る わが魂を陰府から助け出した 力ある愛の
神 力ある愛の人になる 力ある愛の神に魂が連なる 存在即徴 全一 われを憐みたまえ
神は愛なり 祈祷名簿 上着を脱ぎ捨て躍り上りて 信行一如 遂にキリストの姿に化する

【詩篇86】

ダビデの祈禱

- 1 エホバよなんじ耳をかたぶけて我にこたえたまえ。
我はくるしみかつ乏しければなり。
- 2 ねがわくはわが^{たましひ}靈魂をまもりたまえ。
われ神をうやまう者なればなり。
- 3 主よわれを^{よりたの}憐みたまえ。
わが神よなんじに依頼める汝のしもべを救い給え。
- 4 主よわれを^{ひねもす}憐みたまえ。
われ終日なんじによぼう。
- 5 主よわが靈魂はなんじを仰ぎのぞむ
主よなんじは恵みふかくまた赦しをこのみたもう。
- 6 汝によぼう凡てのものを豊かにあわれみたもう。
エホバよわがいのりに耳をかたぶけ、
わが^{ねがい}懇求のこえをききたまえ。
- 7 われわが^{なやみ}患難の日になんじに呼ばわん。
なんじは我にこたえたもうべし。
- 8 主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく、
汝のみわぎに^{ひと}侔しきものはなし
- 9 主よなんじの造れるもろもろの国はなんじの前にきたりて^{ふしおが}伏拝まん。
かれらは聖名をあがむべし
- 10 なんじは大いなり奇しき^{くす}事跡^{みわざ}をなしたもう。
唯なんじのみ神にましますせり。



11 エホバよ、なんじの道をわれに教えたまえ。
我なんじの真理^{まこと}をあゆまん。

ねがわくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまえ。
12 主わが神よ、我心をつくして汝をほめたたえ、
とこしえに聖名^{あわれみ}をあがめまつらん

13 そはなんじの憐憫^{あわれみ}はわれに大なり。

わがたましひを陰府^{よみ}のふかき処より助けいだしたまえり。

14 神よたかぶれるものは我にさからいて起^{おこ}りたち、

暴^{あら}ぶる人の会^{つどい}はわがたましひをもとめ、

斯てなんじを己がまえに置かざりき。

15 されど主よなんじは憐憫^{あわれみ}とめぐみとにとみ、

怒りをおそくし愛^{いつく}しみと真実^{まこと}とにゆたかなる神にましませり。

16 我をかえりみ我をあわれみたまえ。

ねがわくは汝のしもべに能力^{みちから}を与え、

汝のはしための子をすくいたまえ。

17 我にめぐみの憑據^{しるし}をあらわしたまえ。

然ばわれをにくむ者これをみて恥をいだかん。

そはエホバよなんじ我をたすけ、我をなぐさめたまえばなり。

●幼児の心の叫び

「主」に対する呼び求めでありまして、虚しく聖名を唱えていない。

「主よ！」

という呼びかけにおいて、どういう祈りをいたしましたが、この主というものによって、その祈りの個々の句がちゃんと支えられてある。祈りで大事なことは、呼びかけている対象は全愛全能の神です。全能にして全愛であるところのその神を「主」と呼ぶ。私たちが「主よ」というときには、また同時にそれはキリストであります。「主よ」と呼んだその一言において、祈られている内容はみな支えられてある。成就されているということ。

よく、「神さま」とか、「お父さま」とか、「主さま」とかいう言葉を、祈りのつなぎ目におく人がある。ちよつと合間ができるものだから。そんなつなぎ目に置いては大変ですよ。こつちの方がつなぎなんですね、

「主よ、キリストよ」

「父よ、神よ」

というのは、祈りの主体なんですから。それをつなぎ目にちよつと調子をつけるために入れたら、そんな祈りの仕方をしてはいかん。これはその「主よ」という一言にこちらの全



生命として信頼してかかっている。

いかなる人も、祈れないということは絶対にない。

「主よ!」

「キリストよ!」

「神よ!」

ということをも全身をもって叫べないかぎり、祈りは本ものにならない。だいたい、普通の教会や無教会で祈りが本ものにならないのは、ただそれだけのことなんです。ちっとも難しいことはない。ただそれだけのことが本ものにならない。

幼児の心で

「お母ちゃん!」

と言う。その「お母ちゃん」という幼児の心の叫び、それは私たちの神・キリストへの叫びであるならば、これは本当の祈りです。

そうではなくて、何か整ったような祈りのことを一生懸命考えて、そこへつながりしようにして、「神さま」なんて言う。そんなのは神さまの方まで響かない。途中で消えてしまふよ、そういう祈りは。本当に御座にまで響く祈りは――神さまは御座に在り給うんですから――その響きがかかれば、そこらの電波よりもっと凄い、この霊波の響きは。その響きは、霊界の主にたちまち一瞬にして通ずる。そして御霊の主はその祈りの場に臨在なし給う。

その響きを持たないで、つけ足りの「主よ」なんてやったって、これはいくらその内容が素晴らしい神学的な、聖書的な素晴らしい文句を並べたって、ここいらでゴロゴロしてるだけのなしで響かない。大事なのはこれです。そうしたら、直ちに響いてくる。そういう「主よ」であります。もちろん、その主の名をみだりにあげることはしない。ヨハネ伝17章にキリストが「父よ」とかなり波状的に呼びかけておられる。キリストの深い祈禱です。

●「主よ!」と全的に投じて祈る

「主よ」と言つて、あと言葉が続かない。いいですよそれで。あとはもう言葉なんか続かなくていいよ。「主よ」でもうあとはそこにぶつ倒れてしまふ。それは本当の祈り。

「はあ、祈りとはそういうことでしたか」

というようなわけです。

その「主よ」という音が大きい必要はない。小さくていい。沈黙だっていいですよ。沈黙の雄叫びという。それが沈黙であろうが、小さい声であろうが、大きい声であろうが、質的にはそれはみんな全的なものである。

人真似はいらん。皆さん自分の持ち前の、しかしながら、持ち前の全的なところで行か



なくては。そのように「主よ」といつて、

「あなたが一切である」

という角度の「主よ」と呼んだらば、そのあとについて祈られることは祈りながら成就していく。だから、

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

とキリストが言われた。「祈りたることは聴かれたりとせよ」ということの意味は、その祈りの一番の中心が本当に呼ばれているか、聖名が本当に呼ばれているか、そういうことです。そうしたらば、必ず聴かれる。

だから、楽ですね。道を歩いていても、電車の中でも、どこでも。危険にさらされ、あるいは怖いところでも、どこでも。

「主よ！ 主さま！ 助けてください」

「主さま！ 憐れんでください」

「主さま！ 私は苦しい。悲しいです」

といえ、苦しくなくなる。憐れまれる。悲しくなくなる。この「主さま」が本当に響いてくる。自分を隠すことはない。

「神さま、こうです。もつとこう在りたい。もつと勉強したい。もつと絵が書きたい。」

もつとソロバンが上手になりたいです」

と。何でもいい。しかし、それは本当に「主よ！」と全的に投じていけば、そこに祈られることがもはや御利益ではなく、神さまにおいて成就する。祈られることが即ち、神を中心にして「主よ」と呼んでいるときには、神の聖意を求めている。始めは自分の欲望みたいなものだったかもしれないけれども、そんなものは絶願して、その願いが逆に聴かれているという始末です。だから、たとえ現状や環境がどうであっても、それに打ち勝つことができる。その秘訣をこの信仰の世界で、祈りの世界で受けとらなかつたら、これはいつまでたつても始まらない。

●わが魂を陰府から助け出した

この詩篇を見ていきますと、5節、

5 主よなんじは恵みふかく寛容にして、

汝によばう凡てのものに愛しみ豊かにまします。

と。恵みふかく大きく容れて、すべてのものに愛しみ豊かにいます。また、13節に、

13 そはなんじの憐憫はわれに大なり。

わがたましひを陰府のふかき処より助けいだしたまえり。

神さまの大いなる愛しみがいったい何を助けいだしたかという、魂をいと深き淵より、陰府より助け出でした。私たちの存在の中心は魂です。やはり「ネフェシュ」という字を使っ



である。「魂」とか「生命」という字です。それを滅びの陰府から助けいだしたという。

「魂を陰府から助け出す」

というような音信は、旧約においてもかなり深い、新約に近い音信です。

「もう陰府に下つたらどうにもならん」

てなことを歌っているところがちよいちあります。陰府から魂を助け出したという。新約的な曙光しやうこうが少し見えている。それは神さまの愛が魂をどんな深淵、陰府からも助け出したという、この愛の力です。

力ある愛の神

今日は「力ある愛」と題しました。愛といっても、神さまの愛はただ感情的な、感傷的な愛ではない。気分的な愛ではない。神さまの愛はそういった実力をもっている。その魂を、その身体の病を、その悩みを、悲しみを変えて喜びにするとか――イザヤ書61章にあるとおり――そういったマイナスなもの、暗きもの、冷たきもの、悲しきもの、堅きものを、本当の救いにみなもっていく実力のある愛である。だから、「力ある愛」という。神の愛は、主の愛は、この力ある愛であります。

力ある愛の神であるということを信じて祈るのでなくして、祈りが祈りにはならない。

「私は祈るけれども、私の祈りはまだなかなか及ばないからだめだな」

なんていうことは、自分の祈りに頼っているから。自分の祈り方になんか頼って――その祈り方は技術でも何でもなし――

「どうもあの人の祈りは素晴らしいな。どうもなかなかああいう素晴らしい祈りにならないな」

なんて、悲観している。そんなことはないですよ。祈りに素晴らしいもへつたくれもない。大事なのは、このアドナイ（主）が力ある愛のアドナイである。これを本当に信じていれば、祈らざるを得ない。

ですから、どうですか。まだ書いてある、15節に、

「¹⁵されど主よなんじは憐憫あわれみとめぐみとにとみ、

さつきの、「恵み深く寛容にして」と同じことです。

怒りをおそくし愛いつくしみと真実まこととにゆたかなる神にまします。

ここにも書いてある。

「愛いつくしみと信実まこと――ヘセドとエメツ、愛しみとアーメン――とに豊かなる神

にまします」

と。「愛いつくしみと信実まこと」というのは85篇10節にもありましたね。

「あわれみと真実まこととともにあい、義と平和とたがいに接吻くちづけせり」（詩85・10）と。



●力ある愛の人になる

15 されど主よなんじは憐憫とめぐみにとみ、
あわれみ いつく

怒りをおそくし愛しみと真実とにゆたかなる神にまします。

16 我をかえりみ我をあわれみたまえ。

ねがわくは汝のしもべに能力を与え、
みちから

汝のはしための子をすくいたまえ。

17 我にめぐみの憑據をあらわしたまえ。
しるし

然ばわれをにくむ者これをみて恥をいだかん。

と。力ある愛の神さまは、いいですか、力ある愛の神に祈っていると、その力ある愛はその人の中に入ってくる。

「ああ、神さまに救われた、助けられた、おしまい」
ではダメですよ、それで

「感謝、感謝、おしまい」

では。力ある神さまに助けられてくると、そのときにその人は力ある愛の人にならなくては、力ある愛の人に。それが

「汝のしもべに能力を与え給え」
みちから

という祈りです。あなた方一人ひとりが力ある人にならなければダメです。私が普段、

「無だ」

と言うことと反対みたいなことを言うようだけれども、

「力ある愛の人」

にならなくては。感情の愛ではダメです。力を持ったところの愛です。

そのことはあなた方が今度、小諸の集会で実践してください。即ち、互いに助け、重き荷を自ら背負って、人のやりたくないことをやって、ということなことはみんなこれは力ある愛の人になっている。黙々として、自分が力ある愛の人になる。それは力ある愛の神に本当に祈った人は、その人が即ち力ある愛の人にならなければ、その祈りは本当に成就されていない。

●力ある愛の神に魂が連なる

ここに花がある。葉っぱがある。これをして今生かしているところの事態は、この中の水であります。水というものが生命力を持っている。そしてこの花や葉をして生き生きとした光沢のある在り方をさせている。もし、水からこれを離したらしおれてしまう。水という根源に連なっているから、生き生きとした艶のある形、姿をしている。

神に祈って、力ある愛の神に祈って、この祈りにおいて連なっている。魂が連なっている。連なっていれば、たとえば言葉では祈っていないけれども――私たちの呼吸は無意識に呼吸して



いるのと同じように――魂が無意識に祈りの世界にあるような人になる。即ち、それを本
当の祈りの人という。祈る人でなくて祈りの人。

そういった祈りの人になっていれば、ちゃんとこれは今の詩篇と同じように、ここに神
さまの力が、生命が、愛が、光が来ている。自分は何ものでもないですよ。申し上げてい
るとおり、自分は何ものでもない。けれども、自分は連なっていますから――自分は

「無」

なんだけれども――連なっているから、

「無即無限」

と申し上げるわけです。その無即無限の無限を今私は言っている。

皆さんはそれぞれ力ある愛の人である。何となれば、無限なる力ある愛の神に連なつて
いるわけです。そして、のつぴきならない白い花、赤い花、桃色の花に現象している。

●存在即徴

その意味においてこの詩篇の祈りのように、

「恵みのしるしを現したまえ」

とはそのことです。恵みのしるしが現れていないような在り方だったら、それは力ある愛
の神と連なっていない。これはみんな徴です。赤いバラ、桃色のバラ、白い花。これは三角、
これは四角、これは丸、これは星の形、というようなわけです。それはみな徴が現れている。
三角、四角、丸、星という、汝の徴を現したものの。存在即徴しるしでなくてはいかん、私たちは
存在即徴でなかったら、その信仰は観念信仰です。

「ははあ、なるほどそれを無といい、それを無限というのか」

と。そういうようなわけでありまして、私はこの詩篇の正体をつかまえようとして何回も
読んだ。ただ冥想し祈って読んでいただけで、註解書なんか見たつてどうにもならん。そ
うしたらば、ははあと。

「汝の僕に能力を与え給えり。汝に恵みのしるしを現したまえ」

と。皆さんに恵みのしるしが現れています。

「何かしらんが元氣です。何かしらんが絵が書けます。何かしらんが勉強ができま

す、仕事ができます」

というわけです。それはみなこの徴が現れている。それはどこから来ているかという、「主

よ」と、この「主」に全身の投入がかかっていけば、そのときに祈られた内容が、

「わが魂を守り給え」

であれば、守られる。

「我を憐れみ給え」

なら、憐れまれる。



●全一

しかも11節に、

11 エホバよ、なんじの道をわれに教えたまえ。

我なんじの真理まことをあゆまん。

「我は真理なり、道なり」という。

ねがわくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまえ。

12 主わが神よ、我心をつくして汝をほめたたえ、

とこしえに聖名をあがめまつらん

「心をひとつに」

ということと、

「心を尽くして」

という、おもしろい言い方になっている。全心、

「全ての心」

という言い方と、片方は

「一つの心」

という言い方になってる。これ「全一」という。全にして一いち。どう考えても我々の把握せしめられるところの角度は渾然こんぜんとして一つになる。そういった全一。全的、一的。なるほどこの詩篇は心を一つにして、全心を傾けて、そして愛しみ深き力ある神に依り頼む。しかも、

「汝の道を教えよ、汝の真理に歩まん」

と、実に祈りの内容としても健全であります。真理から外れようとしてはいいない。福音における真理とは、思索されるところの真理ではない。福音における真理は即ち、歩んで、それを道としてそれを歩んで初めて把握するところのものが、この福音の真理である。考えて分かる世界ではない。

「道として歩んで然りと身につけるもの」

これを福音の真理という。これは即ち、詩篇が実に健全な、祈りの内容からいきましても、実に健全な祈りであります。典型的な祈りです。

●われを憐みたまえ

1 節に、

1 エホバよなんじ耳をかたぶけて我にこたえたまえ。

6 節に、

6 エホバよわがいのりに耳をかたぶけ、

わが懇求ねがいのこえをききたまえ。



非常に切々たる言い方でありまして、それから3節に、

3 主よわれを憐みたまえ。

われ終日^{ひねもす}なんじによぼう。

というこの祈り。16節に、

16 我をかえりみ我をあわれみたまえ。

ねがわくは汝のしもべに能力^{みちから}を与え、

汝のはしための子をすくいたまえ。

と。「あわれみ給え」が二つ出ている。人間の一番どん底の姿は何かというと、まことに惨めなるもの、「みじめ」という言葉が一番当たるかも知れません。「ミゼラブル」という。人間の現実もそうです。どうにもならん。神さまの愛善です。この憐れみ、神さまの愛善というものを請い求めるのが、一番深い叫びである。

「われを憐れみ給え」

という声を聞きますと、新約聖書のマルコ伝10章、マタイ伝9章あるいは20章に出てくるところの盲人がイエスを呼んで、「われを憐れみたまえ」と叫んでいる、この叫びです。私はこの詩篇を見て、それを想った。そんなことはどの註解書にも書いてない。「憐れみ給え」という祈りは何もこの詩篇に限ったことはない。けれども、ここに切々たる祈りが一つ一つ、ポツンポツンと祈られている。

一番切実な祈りはどれかというのと、やはりその原因のひとつは失明であります。今まで目が見えていた人が失明すれば、一時はおそらく自殺したくなるのも当然だろうと思う。この盲人の最大の願いは見えんことである。

「イエスよ、神の子、ダビデの子よ」

とその盲人が叫んだ時は、「メシヤ」という意味です、「ダビデの子」というのは。「ダビデの子イエスよ」というのは、「救い主メシヤよ」ということ。もちろん、当時のユダヤ人の一般に考えていた意味におけるメシヤという考えでこの盲人もいたでしょうけれども。この驚くべき人は病をことごとく癒す力を持つておられる。神さまは私たちの魂を不義、罪の世界から救い、また肉体を、身体を真の健全なるものにせんとする。この御意は、神の愛しみは一切の人を魂身渾然として全きものに救い上げるといふ、これは神さまの究極のご本願であると思います。

●神は愛なり

ところが、私たち一人びとりの存在というものは、いろいろな環境のもとにまた生い立ちのもとに限定付けられている。その構造はどのようなものであるかは、だれもこれを自ら分析しつくすことはできない。一人びとりがみな違った構造を持っている。もしそれがそうでないならば、もう方程式みたいなもので、それは物質の世界です。この人格的存在



の世界、魂を持っているところの存在の世界は、みな一人びとりが特別なそういった在り方である。神さまはその魂をどのような道を通して、どのように全き世界に持つて行こうとなさるか、自分も知らなければ人も知らない。そこに御意を聴くという、

「御意をなさせ給え」

という祈りがあるわけです。神さまの御意は究極において愛に相違ないのでから、神の御意は、人を審いたり嫌ったりなんてなことではない。これは、

「一切の者に雨を降らせる」

とキリストが言われたとおり、愛に相違ない。しかし、その愛が、どのようにその人に現れていくかということは、これは分からない。神の力ある愛に信頼することにおいては、私たちはもう100%にこれを疑ってはいかん。神さまは愛である。

「神は愛なり」

ということは方程式でなく、これはもう100%に私たちが疑うべきもあらざる事実である。

ところが、頭で「神は愛である」なんてことがいくら分かったって、これはどうにもならない。その愛なる神がどのようにその愛を現し給うか。義にして愛なる神は、どのようにして自らを現し給うか。御意をどのようにそこに展開し給うかは誰も知らん。誰も知らん、自分も知らん。

この盲人はとにかく今は見えない、その一心であります。一つの心、見えないという一心をもつて、キリストはそのような愛の、実力ある愛の方であるという、その見えない一心と、キリストはそのような実力のあり給うという、その一つの全的な信をもつてこの盲人はかかってきた。人が何と言おうが、ますます叫んでいる。

●祈祷名簿

皆さん一人びとり願ひがある。

「私は生涯を通してこういう事をやりたい、あるいは生涯を通してかくありたいものである。あるいは生涯を通してあの人をどうしても救ってやりたい」

と、いろいろな切実な願ひを皆さんは持つていらつしやる。その切実な願ひ、それは神の喜び給う角度に次第にそれが願われていく。始めはただ人間的な願望であつたに過ぎなかったかも知れないけれども、それがいわゆる人間的な願望というところを乗り越えて、

「真に神の栄光が現れるように。神の業としてそこに出てくるように」

と言つて、祈りがだんだん純化されていくと、いよいよ強くなる。そういう祈りを私たち一人びとりは持つているわけです。そのある一つの祈りが成就されれば、またその次に更に大事な祈りが出てくるかもしれない。

ここに住所録がある。

「祈祷名簿というのを皆さんは書いてください」



と私は言ったでしよ。

「祈祷名簿の頭からひとつ祈ってやろう」

といつて、ただ名前をどしどし呼んで、つらつら暗記するように祈ったって、それは私はちよつと具合わるいと思う。

一晩にただ一人のひとか、あるいは何人かしらんけれども、祈るとならば、軽はずみの、軽い祈りの仕方をしないことです。言葉は多い必要はない。短い言葉でいいが、その言葉に全的な質がかかっているか。ある人の名前を呼んで祈る時に、その質がかかっているか、ただペラペラ並べて祈ったって、これは神さまに通じないですよ。それはちよつとご苦労さんな話です。

どうか皆さん、祈る時に、一言その人のために、一念その人のために思つて祈れば、祈った時に直ちに、その人が眠つていようが、何時であろうが、ウワツとその祈りが聴かれる。そういう角度の祈りをお互いにしていけば、これは知らない間に力になってくる。それはわかるです。集会が本当に盛り上がっていくかいかないかは、この祈りがちゃんと実存されているかどうか。何にも外側には見えなくても、それは隠然として力になっていく。

●上着を脱ぎ捨て躍り上りて

この盲人の、

「上着を脱ぎ捨てて躍り上がって跳びゆけり」

と。この一句、

「上着を脱ぎ捨てて躍り上りて」

という一句を見落としてはいかん。この祈りがいかに本ものであつたか、この叫びがいかに本ものであつたかということとは、この「上着を脱ぎ捨てて躍り上りて」ということに表れている。

「さあ、心配するなよ。あのキリストがお前を呼んでおられるよ。立て、汝を呼び

給う」

と。私たちが祈っていて、神さまが祈り求めて、神さまが呼んでおられる。神は耳傾けて聴き、

「よし、来なさい」

と。そうしたら、もうこの盲人は嬉しくてしょうがないから、上着を脱ぎ捨てて躍り上がって行きました。これが即ち、信行一如というわけです。信ずるとは、そのように全身的に投ずることであるというのは、ここに表れている。彼の信仰は即実存として現れる。

●信行一如

アブラハムは、



「約束の子、ただ独りのイサクをお前は犠牲に献げろ」（創世記22章）

と言われた。これを献げたらどうにもならん。アブラハムは「はい」とも言わないで黙って、その言下に彼は支度を始めて、朝まだき出掛けていく。イサクを連れ、剣を持ち、薪を携えて。無言にして従って行つた。

「アブラハムはその信仰によつて義とされた」

とパウロは言い、

「アブラハムはその行為によつて義とされた」

とヤコブは言つた。同じこと。信行一如である。それが

「ヤコブは行為ばかりを強調して、藁の書簡だ」

なんて言つたルターはちよつといかん。ヤコブ書は「藁の書簡」ではない。

その点で西洋人の考え方はまだ分析的なところがある。私たちは、そこは一如として捉まえる。いいですか。東洋的な思惟というものにおける重大な役割がありますから。そういった実存的な思惟。皆さんは非常に大事な福音の道を今、進ませられている。これを棄てたら、もう何をもつて代えることができるかというわけであります。

このアブラハムの信行一如、このバルテマイという盲人の上着を脱ぎ捨てて躍り上がったという、この投身の態勢、身を投げかけている態勢。イエスのもとにやって来たら、

「何を求めるかね？」

どういうことを望むかねと。

「わが主よ、見えんことを！」

先生！ 見えたいですと。

「行け！ 汝の信仰汝を救えり」

と。キリストは、ある時に盲人の目に手を触れたり、あるいは泥を塗ってやつたり、いろいろなことをなさる。この時はただ言葉だけ。

「行け！ 汝の信仰汝を救えり」

と。「見えよ」でもなければ、「開け」でもない。歩けない者に、見当のつかない者に、「行け」ときた。このキリストの驚くべき言葉。これはバルテマイの信が実に驚くべき信でかかってきた。キリストを百%にかかってきた。この百%に対して、キリストはもう百%的な答えです。「行け！ 汝の信仰汝を救えり」と言つたらば、もう目が開いてしまつて、そしてキリストに従つたという。

こういう記事は読んだら、皆さんね、深く冥想して、

「本当にキリストという方は！ またバルテマイの信は！」

といつて、このバルテマイに自らがなり、

「このキリスト、主、メシヤにそのような意味における投入があるか」

と。それを本当に祈りの世界で味わい、身に体していかなければ、聖書の御言は化体しない、



受肉しない。御言が受肉しないような読み方はいくらやったって、研究したってダメだというわけです。

●遂にキリストの姿に化する

これは、

「主よ、憐れみ給え」

という、この「憐れみ給え」ということは感傷的な「憐れみ給え」ではない。

「幸いなるかな、そのひとは憐れまれん。悲しむ者、そのひとは慰めを得ん」

という「憐れみ給え」という祈りの中に、キリストは、我を憐れみ、完全に幸福の世界に、キリストの生命の世界に、憐れみの世界に入れ、またかつ自分を本当に人を憐れむひとにする。祈られることが入ってくると、今度は自分がそのような人にされる。それが徴となること。それが本当の徴です。

この盲人は目が見えた。それはもちろん大きな徴です。その目が見えた盲人が本当の信に入って、このキリストの力で今度は人を憐れむひとになったか、そいつは知らん。

けれども、祈りの世界で一番大事なことは、祈られている事態が成就するばかりでなくて、そのような実存に化せられて、自分自身が、そのような存在そのものが徴となるように、力ある愛の神に祈れば、即ちその人は力ある愛の人となる。もちろん、手放して成っているのではない。常に連なりにおいて成っている、そのような人に。

どうか、そういうわけで、私はこの詩篇の

「我を憐れみ給え」

という、いろいろな祈りの中で一番深刻な祈りをつかまえて——私は今日、福音書をずっと読んだ。そしてこの「我を憐れみ給え」という祈りは、私が今日読んだうちでは盲人の祈りの他にちよつと出てこない——なるほど、失明ということの深刻な現実から叫ばれる祈りは、「憐れみ給え」という祈りだなあと、この詩篇からそこへ来たんです。

そういうことで、私たちはこの力ある愛の神に、主に祈る苦の祈りの質と、しからばその祈られたことがみな即刻に、根源的にはうちに成就して、かつその人となる。それが即ち本当に、

「栄光より栄光に至りて遂にキリストの姿に化するなり」

という事態なのであります。

